

『人生ハンド仏句』3月号) 84) 【物と心の違い。『日本人』という誇り】

先月2月17日より、住職や家族をはじめ、檀家信徒の皆様のご了解を頂き、全国巡拝祈願行脚の修行をさせて頂いております。まあ簡単に言えば、全国の各神社仏閣の神仏様に、「どうか、この乱れた私達の心を平穏にして下さる様に…また、この乱れた社会を丸く平和な社会に戻して下さいます様に…お力添えを頂戴いたします」と言つて、目に見えない根っこの部分を清浄にして頂く為のお願いに、全国の霊力が充滿している寺社仏閣を選び、お参りしているというわけです。2月は関西方面に、3月は関東と九州方面へ参らせて頂く予定であります。既に2月の関西方面への巡拝祈願を終えたわけですけど、本当に色々な体験をさせて頂きました。目に見えない世界ですから、驚く様な不思議な事も多々ありました。神仏様からは、ずっと試されていた様です。これは理屈の世界ではありません。んから、感じるしかないですね。まあ、色々な体験を通して、娑婆に生きる私達人類には、まさに「心の時代」が来ていると確信しました。体験談などは、別号で紹介させて頂きます。その前に今月号では『物と心』について、そして『日本人の素晴らしさ』について、お話しさせて頂きます。まず『物と心』について…。

戦後、日本は必死になって働き続け、たったの24年間で、世界有数の経済大国に上り詰める事ができました。戦後、物資が極端に不足し、飢えに苦しむ人を多数排出した時代とは一変し、現代社会の豊かさに何不自由なく取り囲まれている私達です。もう当たり前の様に、『物』は私達の周囲に溢れかえっています。でも、私達の生活に本当の豊かさは感じられません。この状況を踏まえて物はもう十分だ、足りないのは心だとよく言われますが、よく考えてみると、物は有り余っているから、お次は心だという二者択一の考え方は、どこかおかしくないですか? 『物』と『心』を二つ並べて、物の代わりとして、心をあげると、物を一生涯懸命に作り出した様に、心も集中生産で作りに出せると思つのは大間違いですね。自分の当たり前という考え方を転換し、生き方を変えなければ精神的な飢餓感を解消することは出来ないであります。目に見える物を生産するのも大変なことです。それより大変なのが、自身の心を耕すことでもあります。そして家族や友人の心を耕す、お手伝いをして差し上げることです。そして、世界中の民族を見渡してみると、その心を耕すことに秀でている民族が存在するのです。それは、ひと昔前の精神を持った、古き良き時代の『日本人』であると、私はいくつかのエピソードを知るにつれ確信に変わりました。

『日本』と『日本人』に誇りが持てなくなった、現代日本人を多くお見受け致しますが、それは本当の日本人精神を知らないからではないかと思っております。私は、現代の状況を見聞しており、いてもたってもいられなくなり、巡拝行脚を計画させてもらったというのが正直なところなのです。そこで、『日本人精神の素晴らしさ』について、私の知り得るところで、いくつかのエピソードを、ご紹介させて頂きます。

中にいれれば見えない事も、外から見れば、ハッキリ映し出される事もあります。その意味で、外国人から見た、古き良き日本人の姿を観察してみましょ。

「この国の人々は今までに発見された国民の中で最高であり、日本人より優れている人々

は異教徒の間では見つけられない。彼らは親しみやすく、一般に善良で悪意がない。驚くほど名誉心の強い人々で、他の何ものよりも名誉を重んじる。大部分の人々は貧しいが、武士も、そういう人々も貧しいことを不名誉とは思わない…。天文18(1549)年キリスト教布教のために日本にやってきたフランシスコ・ザビエルが本国に送った手紙です。それから3百年、江戸末期から明治にかけて沢山の外国人が日本を訪れ、日本と日本人についての感想を残しています。イギリス人女性旅行家で紀行作家のイザベラ・バードは明治11(1878)年5月に来日し、東北や北海道を旅行してこう記した。「ヨーロッパの国の多くや、所によって我が国でも、女性が外国の衣装で一人旅をすれば現実の危険はないとしても、無礼や侮辱にあったり、金をぼられたりするものだが、私は1度たりとも無礼な目に遭わなかったし、法外な料金をふっかけられたこともなかった」。安政3(1856)年、通商条約を結ぶために来日したハリス提督は、日記にこう記している。「彼らは皆よく肥え、身なりもよく、幸福そうである。一見したところ、富者も貧者もない。これが人民の本当の幸福の姿というものだろう。私は時として、日本を開国して外国の影響を受けさせることが、この人々の普遍的な幸福を増進する所以であるかどうか疑わしくなる。私は質素と正直の黄金時代を、いずれの他の国におけるよりも多く日本において見出す。生命と財産の安全、全般の人々の質素と満足とは、現在の日本の顕著な姿であるように思われる」。明治23(1890)年来日のドイツ人宣教師の記録の中には、「私は全ての持ち物を、ささやかなお金も含めて、鍵を掛けずにおいておいたが、一度たりとも無くなったことはなかった」。フランスの詩人ポール・クロードンは大正10(1921)年、昭和2(1927)年まで駐日大使を務めたが、第2次大戦で日本の敗戦色が色濃くなった昭和18(1943)年パリで言った「日本は貧しい。しかし高貴だ。世界でどうしても生き残って欲しい民族をあげるとしたら、それは日本人だ」と…。

私達の祖先は勤勉・正直・親切・謙虚・素直・感謝といった徳目を規範に、幾世紀も暮らしてきた民族だったのです。これら外国人の証言は、そのことを明らかにしています。皆さんいかが思われましたか？私は、そんな『日本人』であることに誇りを持っています。私達はいま1度、日本人の美質を取り戻し、後世に渡さなければならぬ使命があります。私達1人1人がこの美質を涵養し、発揮した時、日本は真に豊かな国となる事です。日蓮聖人が仰った『立正安国』とはこの事を示しているのです。

21世紀は本当の意味で「心の時代」に突入しました。映画「おくりびと」でもアカデミー賞を授賞しました。ニュースを見た時、私は涙が出ました。日本人の精神を、物で豊かになった人々が求めているのです。世界は、古き良き時代の、日本人精神を求めているのです。アメリカナイズされて、アメリカに染まっている場合ではありません。老若男女1人1人皆が、気づかなければなりません。気づかなければ、この地球と共に、人類は沈没するでしょう。気づいた人から実行しましょう。実行した人から心が洗われ、救われていく事でしょう。皆が、お互い様の精神を大事にし、まずは自分から…です。(つづく)